

~~~~~  
 翻 訳  
 ~~~~~

## 翻訳 著者不詳「ヨーゼフ・フォン・ゾネンフェルス」

川 又 祐

2018年11月、フーベルト・ハイッス (Hubert Heiss) 駐日オーストリア大使による特別講演が日本大学法学部において開催された。特別講演後、ハイッス大使から、2019年に日本・オーストリア外交樹立150周年を記念して展覧会が開催されることをお聞きした。この記念展覧会「ウィーン・モダン クリムト、シーレ 世紀末への道」において、グスタフ・クリムトやエゴン・シーレの作品と並んで、驚くことにヨハン・セバスティアン・ランピ (子) 作のヨーゼフ・フォン・ゾネンフェルスの肖像画が展示された<sup>(1)</sup>。カメラリストなかんずくゾネンフェルスの肖像画が国内で展示されたのはおそらく初めてであろう。2019年は奇しくも日本大学創立130周年の年でもあった。ハイッス大使は、2019年12月、日本大学管弦楽団がサントリーホールで日本大学創立130周年記念特別演奏会を開催した際、光栄にも来場して下さった。

本稿は、ヴルツバハ (Constant von Wurzbach, 1818-1893) が、1750年から1850年まで、オーストリア帝国領内において誕生し、あるいは同地において生活し活動した重要人物の伝記を編纂した『オーストリア帝国伝記事典』 (*Biographisches Lexikon des Kaiserthums Oesterreich*) 全60巻中の第35巻に掲載されている項目「ヨーゼフ・フォン・ゾネンフェルス」の翻訳である。本文は、前後半に分かれている。前半はゾネンフェルスの伝記本文 (pp.317-328)、後半は「1. ゾネンフェルスによって公刊された著書、年代順一覧」以下、ゾネンフェルスに関する資料の説明となっている (pp.328-343)。本稿は、前半の伝記部分の翻訳である。

### 凡例

括弧 ( )、[ ] の用例は原文のままである。[ ] 内に示された巻数、頁数は『オーストリア帝国伝記事典』のものである。

括弧 「 」、『 』はドイツ語引用符 „ “ の箇所を表している。『 』は書名を表している。

括弧 【 】は、翻訳者が便宜的に挿入した原文の頁数である。

括弧 [ ] は翻訳者による訳文の補足、そして原語の表記を表している。

### 翻訳

【p.317】 ヨーゼフ・フォン・ゾネンフェルス（政治家、1732年、モラヴィアのニコルスブルク [Nikolsburg in Mähren] に生まれ、1817年4月25日ウィーンに歿する）。ゾネンフェルスの年齢や死亡日については、別のもも挙げられている。私たちには、84歳で、1817年4月26日歿があり、さらに87歳で、24日歿、などなどがある。ウィーン市の死亡台帳 [Todtenverzeichnis] では——それは【p.318】とりあえず最も信頼できる資料である——、1817年4月25日、85歳、ヴォルツァイレ [Wollzeile] 827番地で、老衰で亡くなる、とされている。この記録に従うと、上記の申し立てが確定されるのである。ゾネンフェルスはイスラエル人の系統である。彼の祖父は、イスラエル人の学者であり、ベルリンのマルク・ブランデンブルクのオーバーラントラビ [Oberlandesrabbiner、ユダヤ教聖職者] である。ベルリン・リップマン [Perlin Lipmann] という名前であったゾネンフェルスの父親は、洗礼を受け、ニコルスブルクへ移住した（父親についての詳細は、332頁を見よ）。ヨーゼフは、弟フランツ [Franz] 同様、モラヴィアとニーダーエストライヒとの境界にある有名なモラヴィアの小都市、その領主がディートリヒシュタイン侯爵家 [das Fürstenhaus Dietrichstein] であったニコルスブルクに誕生した（後者の弟については、個別の項目315頁を見よ）。ユダヤ人出生簿は、〔その作成が〕1735年にやっと始まったので、ゾネンフェルスの誕生日、誕生年は確定できない。ニコルスブルクの領主カール・フュアスト・ディートリヒシュタイン [Karl

Fürst Dietrichstein] [第3巻、302頁] は、〔ゾネンフェルスの〕父に対してすでに大きな厚情を示し、彼の息子たちに対しても同じように親切であった。老齢になってもゾネンフェルスは、少年のころ、その勤勉さの褒美に主君からもらった何枚かのグロッシェン硬貨を見せることがあった。ヨーゼフは、生まれ故郷のピアリスト派ギムナジウムに通ったが、彼自身の主張によるとあまり勉強はせず、「ハンガリーの荒野の牧夫のような」ラテン語を話した。当時のスタイルに従って彼は、ウィーンで哲学の講義を聴き、彼が学校の哲学を学び終えた時、彼は13歳を数えたばかりであった。さて16歳まで、彼の学業は停滞していた。しかしそれを打ち破るのは、多くの若者の生活に浮かぶ決心しかない。すなわち聖職者あるいは僧侶になる決心である。それはすぐに再び消えてしまうので、あまり意味を持たない発作である。それがゾネンフェルスにも起きたのである。その間に父親が厄介な状況に追いやられ、ある村へ転居した。村ではゾネンフェルスは、しつても指導もないまま、ほとんど手に負えずに生活した。そして、彼は突然兵士になりたいという気持ちを感じて、実際に兵士になってしまったのである。彼は今やヨーゼフ・ヴィーナー〔Joseph Wiener〕〔彼がどのようにしてこの名前になったのかは、ゾネンフェルスの父親に関する資料を見よ〕という名で、ドイツマイスター連隊に仕えた。それは、当時18世紀中葉、クラゲンフルト〔Klagenfurt〕に駐屯していた。この連隊にゾネンフェルスは5年間留まり、その間に伍長〔Unterofficier〕に昇進した。しかしこの5年間は、彼にとって無益なものではなかった。彼の大佐ラスヴィッツ男爵〔Freiherr von Laßwitz〕と大尉エルヴェニヒ男爵〔Freiherr von Elvenich〕は彼に親切であった。軍務で許された多くの余暇を、彼は、勉強での遅れを取り戻すことに費やした。彼はとりわけ語学に取り組み、連隊がボヘミヤにやってきた時、フランス人脱走兵からはフランス語を、ソボトカ〔Sobotka〕やユングブンツラウ〔Jungbunzlau〕の少女からは、ゾネンフェルスが自分自身で書いた伝記の断片〔Fragments〕<sup>(2)</sup>の中で伝えて

いるように、ボヘミヤ語を習得している。その際彼は、たくさん、もちろんすべて何でもかんでも、ローエンシュタイン [Lohenstein]、クリップハウゼン [Klipphausen]、テランダー [Telander]、ノイキルヒェン [Neukirchen] を読み、ホーフマンズヴァルダウ [Hofmannswaldau] 流の詩を作り、そのかたわらで錬金術 [Alchymie] を学んだ。頻繁に駐屯地を変えた連隊は、ついにハンガリーからウィーンにやって来た。その間に父親の資産状況がある程度改善され、軍人身分としての見通しが思わしくなかったため、ゾネンフェルスは除隊することを考えた。【p.319】 皇后の第二上級ホーフマイスター [Obersthofmeister] 夫人であったトラウトソン [Trautson] 侯爵夫人と、当時的大公ヨーゼフのカンマーヘア [Kammerherr] であったヨハン・カール・ディートリヒシュタイン [Johann Karl Dietrichstein] 伯爵の仲裁によって、ゾネンフェルスは除隊を認めてもらった。しかし今や重要なのは、一生の職業選択であった。彼は、ウィーン大学で当時の自然法教授マルティーニ [K. A. Martini] [第17巻、33頁] の講義を聞いた。ゾネンフェルス自身書いているように、マルティーニの簡潔で説得力のある講義によって、彼は初めて考えることを教えられたのである。当時、ニーダーエストライヒ政府において通訳 [Dolmetsch] として勤務し、そしてヘブライ語で授業をしていた父親のもとで、彼はヘブライ語と中世ラビ語 [rabbinisch] を習得した。法律学の勉強を終えた後、彼は、最高司法機関の宮廷参議官 [Hofrath der obersten Justizstelle] であるフォン・ハルティヒ [von Hartig] 伯爵のもとで法実務を積み、2年間活動した。だが自分の職業の労働以外に彼は、文学にも関心を抱き続けていた。すなわちドイツ語、本来の高地ドイツ語に対して関心が呼び起こされた。それは当時のウィーンではほとんど無視されていたものである。宮廷図書館職員の机の上にドイツ文学の本があるのに気づいて、そのニコライ [Nicolai] の力強い筆致で書かれた一節を偶然読んだことによって、彼はとりわけ衝撃を受けた。そこにはこう書いてあった。「オーストリアには、他のドイ

ツ語諸国の注目を受けて当然の作家がまだ一人もいない。趣味〔Geschmack〕の良さは、少なくとも、ようやく幼少期にあったドイツ語に関しては、1730年ごろのザクセンやブランデンブルクがすでに到達していた状態には及ばない。他のドイツ語諸国全体で不満の口笛が吹かれているシャイプ〔Scheib〕、シェーナイヒ〔Schöneich〕、ゴットシエト〔Gottsched〕は詩人と名のっているが、これらの惨めな作家のうち自国民〔Eingeborner〕はほとんど一人もいない」。最初ゾネンフェルスは、このベルリン人の情け容赦ない言葉に国民的侮辱だけを感じ取っていた。だが、落ち着いてしっかりとそれを考えると、物事が違って見えたのである。熟考の結果、彼は、オーストリア以外の国々でも賞賛される作家になる決心をした。この頃（1761年）フォン・リーガー〔von Riegger〕教授〔第24巻、121頁〕は、ウィーンにドイツ語学会〔eine gelehrte deutsche Gesellschaft〕を設立し、ゾネンフェルスもそれに加入するよう招かれた。ボブ〔Bob〕〔第2巻、2頁〕、カウツ〔Kauz〕〔第11巻、90頁〕、マルティーニ、シュペルゲス〔Sperges〕、シュピールマン〔Spielmann〕、トゥーグート〔Thugut〕などが会員だった。ゾネンフェルスは入会した。だが、〔学会への〕援助〔者〕を見つけ、気の利いた運営がされたならば、有益になることができたであろうこの学会は、すぐに崩壊した。ゾネンフェルスは、その学会の中で、次のような多くの講演や講義を行った。貴族について、マリア・テレジアについて、母国語を研究する必要性について、などなど。それらは彼の著書の中に引用されている。ゾネンフェルスは、ドイツ文学を研究することを通じて、無意識に急き立てられたこの新しい方向の中で、出世を確実にするために、講座、ドイツ文学のそれに注意を向けたが、それはすでに——ポポヴィッチュ〔Popowitsch〕〔第23巻、108頁〕が——就いており、その結果、彼の願いは却下された。自分の知識と好みにふさわしい地位を獲得しようとする別の試みも同じく失敗し、最終的に父親からの【p.320】世話から抜け出すために、年俵400フローリンで、親衛隊会計係〔eine Rechnungsführerstelle bei der

Arcièrengarde] の職に応じた。だが、この取るに足りない、そしてゾネンフェルスの才能や実行力に見合わないこの職を通じて、彼の将来を決定づける運命の転機がもたらされた。親衛隊の筆頭副官は当時、エルンスト・ゴットリーブ・フライヘア・フォン・ペトラッシュ将軍 [der General Ernst Gottlieb Freiherr von Petrasch] [第22巻、104頁、資料1] で、教養と人間性に優れた人物であった。職務上の接触はすぐにほとんど親密なものとなっていった。将軍は、若くて才気あふれる、前向きな人物に強い関心を抱いた。そしてゾネンフェルスが務めている職がどうみても彼にふさわしくない、とすぐに気づいた。ペトラッシュは、機会があり次第、ゾネンフェルスを自分と親交のあったフォン・ボリー男爵 [Freiherr von Borie] [第2巻、66頁]、陛下に影響力のあった人物に推薦した。フォン・ボリー男爵を通じて、ゾネンフェルスは1763年、ウィーン大学政治学教授職を手に入れ、今や得意満面となった。給料は当該職にまったくふさわしくない金額、年俸500フローリンと査定されたが、すぐに、当時の枢密参議官フォン・ケーニヒ男爵 [Staatsrath Freiherr von König] の抗議でそれは1200フローリンに増額された。ゾネンフェルスは、アルネート [Ritter von Arneth] が述べているように、この職にあって、当時大陸全体に浸透していた新しい理念を忠実に、時には用心深く代弁するようになった。その立派な講義とその熟練した内容によってすぐにゾネンフェルスは、若者からの好意と尊敬を獲得していった。定期刊行物の中で彼は、数世紀の間に文化の樹 [der Baum der Cultur] に顕著となってきた、その発展を阻害してきたあらゆる弊害、すなわち迷信、利己主義、教育の著しい不足、貴族の偏見、過剰で役に立たない修道院、養育院 [Asyl]、そして避難所 [Freistätten] などなどに反対した。彼の見解の率直さから彼に敵がいなかったわけではないことは簡単に分かる。彼に対して秘密裏にまた公然と非難が出された。だが偉大なる皇后陛下はそれに惑わされることはなかった。劇場での下卑た話や、即興劇の馬鹿さ加減に対してゾネンフェルスは、執拗に論争を開始した。そ

のためすぐに舞台上で嘲笑されたが、彼はそれを気にもかけなかった。即座にゾネンフェルスとハンスヴルスト〔Hanswurst、道化役〕との間で生死をかけた論争が勃発した。ハンスヴルストは、ペンに対抗して打篋〔Pritsche〕<sup>うちべら</sup>を使ったやり方で自分の存在を守り、どんな攻撃にも、大きな打撃を受けず、糞投げのしっぺ返しもしなかった。クレム〔Klemm〕によって書かれた喜劇『パルナソス山へ移された緑色の帽子〔*Der auf den Parnaß versetzte grüne Hut*〕』の中で、ゾネンフェルスは、ハンスヴルスト本人として舞台に出された。ゾネンフェルスの服装、歩き方、ふるまい、つまりゾネンフェルスの人物全体がそっくりものまねされた。イタリア人も喜歌劇の中で二度、そのように侮辱している。俳優たちの下品さによって——その下品さには、いずれにせよ彼らの歴史があり、残念ながら歴史記述家がいたわけではない——、シュムッツァー〔Schmuzer〕によって彫られたゾネンフェルスの肖像画〔肖像画10番を見よ〕とまったく同じように、(当時のハンスヴルスト役〔Bernardon, ベルナルドン〕の本名クルツ〔Kurz〕が入った) ベルナルドンの肖像画が、(ランデラー〔Landerer〕によって) 一枚の銅版画に彫られるようになったほどであり、その結果、〔2つの版画を並べると〕両者の顔が見つめあう【p.321】ようになったのであった<sup>(3)</sup>。だがゾネンフェルスは、一度足を踏み入れるとどんなものにも屈することはなかった。ゾネンフェルスの論文に対して申し立てられた苦情を、皇后マリア・テレジアがある講演で解決した時のことである。「コメディアンたちはお荷物であり、お荷物であり続けます。そして宮廷参議官フォン・ゾネンフェルスは、批判を書くよりももっと良いこともできるのです。マリア・テレジア」と。ゾネンフェルスは、それに動揺することなく、実際に、さらにこうしたお荷物に対抗することが何より良いことだと考えた。しかも彼はそれらを通じて、オーストリアの舞台改革者となった。それは彼に「オーストリアのレッシング〔Lessing〕」と呼ばれる名誉をもたらした。彼は多くの、そして不当な仕打ちを乗り越えることができた。上述したように、その対象がゾネ

ンフェルスであったあらゆる攻撃や非難は、成功することはなかった。1767年、ウィーン大学でフォン・ケース〔von Kees〕によって擁護された学説が、官僚社会、上流社会に公式の混乱を引き起こした時、ゾネンフェルスは、まさに宗教を嘲笑する者、皇帝を侮辱する者、若者をそそのかす者と言われるようになった。その問題は見逃されずに調査されたが、それによって、ゾネンフェルスが、皇帝・国王参議官という称号を受け取るという結果となったのである。ゾネンフェルスは、自分の講演や雑誌を通じて活動した。それらは、次のような時として全く風変わりな表題を持っている。『誤認されし者〔Der Verkannte〕』、『偏見なき人〔Der Mann ohne Vorurtheil〕』、『テレジアとエレオノーレ〔Theresia und Eleonore〕』などなど、大変に刺激的で啓蒙的である(328頁、彼の著作目録を見よ)。私たちは、文化や国家の様々な方向に大きく及ぼした影響を詳細に叙述する前に、ここで彼の公職歴を簡潔に概観する。やや長期の教職活動の後、彼は、皇帝・国王参議官、1779年には宮廷参議官になった。彼は——28歳で——遅れて公職歴に踏み入れたにもかかわらず、勤続年数20年足らずで宮廷参議官という堂々たる職に昇進した。それ以外にも彼は、研究・宮廷委員会〔Studien-Hofcommission〕、検閲・宮廷委員会〔Censur-Hofcommission〕、さらに立法問題宮廷委員会〔Hofcommission in Gesetzsachen〕の委員〔Beisitzer〕として招かれ、最後のものについては副委員長〔Vice-Präsident〕に任命された。彼の功績をとくに表すものとして彼は1804年、聖シュテファン騎士団の小十字勲章〔Kleinkreuz des St. Stephans-Ordens〕を受章した。ウィーン市当局は、1806年市民権授与を通じて彼に名誉を与えた。1810年には彼は、帝国・王国造形芸術アカデミー院長〔Präsident der k. k. Akademie der bildenden Künste〕に選ばれた。その名誉職に彼は最期まで就いていた。晩年、現役ではあったものの、体が弱っていたので彼は、造形芸術アカデミーの式典には参加しても、一人で〔控えの〕部屋に動かずにいた。この機関に彼は自分の能力のかなりの部分を犠牲にしていた。そして戦争や、宮



廷と貴族の側の参加がなかったことによって、彼がカウニッツ〔Kaunitz〕と連携して生み出したこの小さなものがいかに破壊されていったのかを悲しみながら見ていた。それによって、高齢となつてから、外国では啓蒙主義や発展の代表者と見なされるようになった彼は、年齢を重ねるごとに得られた慧眼で、国家は衰退をしている、つまり、国民が勝ち取った多くの成果が少しずつ海へ投げ捨てられていると気づいて、彼は不機嫌になっていったのである。そしてそれ以外には【p.322】——せいぜい、時折彼を訪れる友人にしか——、鬱憤を晴らす機会がほとんどなかったのも、彼は芸術アカデミーが彼に提供してくれた機会を利用して、自分が経験した種々の失望に対する悲しみを話して気持ちを楽にしたのである。『新自由新聞〔*Neue Freie Presse*〕』（1867年1195号）で初めて印刷された高齢政治家の文書は、当時の状況や、彼の変わらぬ率直さがいかに栄冠が与えられたのかについて、ゾネンフェルスが感じていた苦しみに際立った光を投じている。ゾネンフェルスが演劇界の改革に影響を及ぼした程度、彼がそこで戦わなければならなかった妨害、そしてそれにもかかわらず、時代や進歩的な良風〔*Gesittung*〕の要請に合致した舞台をウィーンに作り出すことにどのようにして彼が成功したのか、は上で述べられてきた。あらゆる状況の中で優良な舞台が、国民教育と良風の強力な手段であり、手段であり続けるということが否定できない場合、ゾネンフェルスがオーストリアの改革者の中でこの面では第1位を獲得するのである。文学の面では、ドイツ人が帝国内で恥ずかしいと思う必要のない著述家にオーストリアでなるという任務を最初から立てていたゾネンフェルスは、ドイツ人著述家たちと種々の関係を築き、オーストリアに対して彼らの関心を呼び起こすことを彼は怠らなかったのである。このことで彼は多くの面で成功したが、もちろん完全に忘れることが必要とされる他の面で、ゾネンフェルスはつまづき、そして彼は、そばに危険な競争相手がいるという不安に迷わされて進んでしまった。そのことが、さもなければ賞賛すべきこの人物に影を落とすことになったのである。

すなわち、1768年以来、レッシングをウィーンに引き入れる試みが繰り返された時にゾネンフェルスが巻き込まれた醜聞のことである。残念ながらこれは、望ましい結末に到達しなかったことが知られている。何に失敗したのかは——レッシングをウィーンに連れて来る努力が盛んであったのに——、今日まで解明されていない。公刊されているゾネンフェルスからクロッツ [Klotz] に宛てた書簡や、レッシングの後の妻エヴァ・ケーニヒ [Eva König] からクロッツに宛てた書簡から、ゾネンフェルスがこの陰謀に深く関わっていたことは、もはや疑いようのないことである。ゾネンフェルスの生涯の中で、隠されていたわけではないが、こうしたまさに純粹ではない点が再び明るみに引き出されたのは、ごく最近の成り行きであったのである。それらの詳細は次の資料を参照せよ。「ゾネンフェルスとクロッツ [Sonnenfels und Klotz]」 [336頁]、「ゾネンフェルスとレッシング [Sonnenfels und Lessing]」 [337頁]。ゾネンフェルスは、非の打ちどころがなく、相対的に極めて賞賛すべきなのである。なぜなら、ウィーン大学の教員として、生き生きとした言葉と、著作とを通じてほぼ四半世紀活躍したからである。国家学の歴史をある程度まで知っている者は、どんな事態にあってもゾネンフェルスにはふさわしい地位をあてがわなければならない。オーストリアにおけるこうした方向の中で先駆的に登場したという事実以外に、彼が自分の見解において自己創造的であったかどうかは、ここでは問題とはならない。彼自身、他人の手柄を横取りするというのではなく、1763年皇后に宛てられた請願の中で、自分の講義計画を提示するよう要請されて、次のように【p.323】書いて明確に自分の資料を挙げたのである。「その価値が例外なく認識されているきわめて有名な著述家、『法の精神 [L'esprit de loix]』<sup>(4)</sup>、『商業の原理 [Les Elements du Commerce]』<sup>(5)</sup>、『商業の理論と実践 [La theorie et la pratique du Commerce]』<sup>(6)</sup>、そしてムロン [Melon]<sup>(7)</sup>、ピカール [Picard]<sup>(8)</sup>やデヴィッド・ヒューム [David Hume] の類書、ドイツ語地域やフランス語地域の著述家ともども、が私の師であり、

彼らが私に一般原理を貸し与えてくれた」。ヨーゼフ・ファイル〔Joseph Feil〕は、彼の『大晦日募金、ゾネンフェルスとマリア・テレジア〔*Sylvesterspende: „Sonnenfels und Maria Theresia“*〕』の中で、この問題で行われた交渉を、帝国・王国教育省公文書館〔das k. k. Unterrichtsministerium〕の文書に従って事細かに説明している。だが、彼の講義それ自体に関して言えば、彼は、『ポリツァイ学〔*Polizeiwissenschaft*〕』の中で大規模にそして啓蒙時代の精神に従って国家学〔*Staatswissenschaft*〕を教えた。しかし啓蒙時代は、正しくも、国家や国民生活の歴史的基盤に対する理解を失わせたと非難され、そして啓蒙時代は、最も素晴らしい、何世紀にもわたる経験によって得られてきた制度や成果を一方向的に当時の哲学教説の下に置いたのである。ゾネンフェルスは啓蒙の人であった。彼がこの重要な教職に就いた時、彼は男盛りで激しており、アウゲイアスの家畜小屋掃除〔*Säuberung des Augiasstalls*〕で大掃除をすることが重要であった状況の真ただ中で、多くの優良で健康な萌芽も一緒に〔抜き〕取ってしまった。彼はもっとゆっくり行うことができたであろう。彼がそれをしなかったのは、彼のせいというよりも、まだ中世的教説が機能していた国家の衰退した下部構造をできるだけ早く除去する必要性のせいであった。それによって得られた利益は、この過程で生じた、全体としては微々たる損失を十分に上回っていた。彼自身がどのように時代とともに歩んだのか、彼の学問分野における経験や変化をどのように考慮していたのか、それは、1765年に初版が刊行され、それから半世紀に8版が必要とされた彼の著作『ポリツァイ、商業、財政学の基本原理〔*Grundsätze der Polizei, Handlung und Finanzwissenschaft*〕』の各版を比較することで納得できるはずである。そのように様々な版を比較することで、ゾネンフェルスがその時代の状況や考えをいかに顧慮していたかに気づかされるであろう。ところでそれは、教職にあったゾネンフェルスには簡単に行えたのである。言及したファイル〔Feil〕の文書（10-33頁）は、どのような戦いに、ゾネンフェルスが自

分の講義の中で述べていた見解をめぐって耐えねばならなかったのか、彼が1767年から1772年の間に繰り返し公に自分を正当化しなければならなかったのか、を教えてくれる。もちろん彼は常に勝利をつかみ取り、彼の率直さと才能によって、時とともに彼に与えられることになるより高い顕職への道を切り開いていった。ハンスヴルストの迫害者としてゾネンフェルスがハンスヴルスト自身に対していかにつらくあたったのかはすでに上述されているが、進歩の人、啓蒙主義の代表者としてのゾネンフェルスはそれ以上うまくいかなかった。彼に反対し、彼を公然と侮辱したのはまたもや舞台であったのである。俳優シュテファニー・デア・ユンゲレ [Stephanie der Jüngere] に任せられるべきことは、彼によって書かれた作品「流行のヨーデル歌手 [Der Jodler nach der Mode]」を通じて、ゾネンフェルスの記憶を傷つけることではなく、自分自身の思い出を辱めることである。なぜなら、シュテファニーは、ゾネンフェルスに照準を合わせて、ゾネンフェルスの【p.324】容貌、服装、ふるまいを嘲笑したこの風刺 [Pasquill] によって自らを裁いたのであった。ゾネンフェルスは、いずれにしても自分の恩人で、シュテファニーは〔自分に〕示された恩恵をそのようなやり方で彼に報いたのである。1779年以降、ゾネンフェルスは、研究・検閲委員会の調査参議官であった。彼はこうした身分で、書籍複製に票決を行った。有名なウィーンの印刷業者トラットナー [Trattner] は、オーストリアで当時許されていた書籍複製の範囲を最大限に拡張することを目論んで、この目的のために、自分が複製しようとした最高の著述家の広範囲にわたる選書目録を作成した。この目録をトラットナーは、1784年12月3日、ウィーンのきわめて有名な著述家たちの審査にかけた。ブルーマウアー [Blumauer] は、トラットナーの目論見が法と正義に反していて、外国人に対しては恥ずべきで、非愛国的だと説明し、マスタリール [Mastalier] がこの計画を嫌悪すべきで不公正なものと呼んだ後、ゾネンフェルスは、ボルン [Born] とハシュカ [Haschka] と一緒にこの複製を追剥ぎと同一であるとした。官職に

あったゾネンフェルスは、ポリツァイ立法の問題に絶え間なく悩まされた。外国の立法とポリツァイ制度〔の情報〕を収集し、研究しながら、彼の主眼は、その中にある実際の明白な矛盾を探し出し、根拠のないもの、あるいは変化した時代状況によって不要となったものを取り除き、現在の要請に合致した精巧なものをもたらすことに向けられた。とりわけ今日でも重要な票決の問題、すなわち多数決による決定問題が後年、彼を悩ませた。それについて1801年、彼の意見が公刊された。それをめぐっては剽窃論争が巻き起こった。だがゾネンフェルスは、『イエナ総合文芸新聞〔*Jenaer allgemeine Literaturzeitung*〕』に発表された書評で自分の出版物に対して、公正な評価を与えてくれた専門家をフォイエルバッハ〔Feuerbach〕に見出した。ゾネンフェルスに名誉市民権を与えたウィーンそれ自体のために、彼は多くの功績を上げた。彼の小さくはなかった功績には、やはり彼を不愉快な争いに巻き込んだ照明の改良があった。それについてはブルンナー〔Seb. Brunner〕が自分の『啓蒙時代の謎〔*Mysterien der Aufklärungszeit*〕』で言及している。以前の照明賃借人デュプレ〔Fr. Norb. Duprée〕によって市内の照明制度が崩壊した後、統治参議官〔Regierungsrath〕という資格で、ゾネンフェルスは旧市街、新市街〔Vorstadt〕、そしてグラシ〔Glacis〕地帯の照明を2年以内で全く新しく作り直した。それは一般に満足のいく成功を成し遂げた。皇后マリア・テレジアは、ゾネンフェルスの功績を認め、1779年12月11日、ホーフカンツライの講演で次のように決定した。「ゾネンフェルスがこの仕事（照明）をうまく行ったので、ゾネンフェルスは、照明基金〔illuminationen fondo〕から2(000)フローリンの報償を継続的に受け、そして、彼に別に就かせる機会が来るまで、政府で勤務を続けられる宮廷参議官の称号を無給で継続すべし。署名〔*manu propria*〕』と。使用人条令〔*Gesinde-Ordnung*〕もゾネンフェルスは、改革の範囲の中に入れ、それに関しては高齢（1810）になってから、家庭生活、家族生活に重要で、考えられる以上にしばしば【p.325】非現実的に扱われてしまう領域での彼の長

年にわたる経験が明瞭に説明されている票決を著書で公刊した。彼の『内務行政便覧〔*Handbuch der inneren Staatsverwaltung*〕』が完成しなかったことは、現存している断片を入念に検証すれば、残念に思われてならない。心の髓まで進歩の人であった彼自身、明らかになった現象に少なからず驚いて、フランス革命と、最も大胆な思想家でも予測できなかったその現象にゾネンフェルスは、一層悩まされた。彼のこれらに関する意見の結果を彼は1797年、『ドイツのメルクーア〔*Deutscher Merkur*〕』で公表した。オーストリア刑法典の節〔Abschnitt〕も大部分彼によるものである。暴動、すなわち、今日、刑法学者にはよく知られている主題について、ゾネンフェルスの時代ではとても新しいもので、ゾネンフェルス自身、「暴動」の十分な概念定義をどこにも見出すことができなかった。長年ずっと、つまり晩年も彼を悩ませた次の主題は、法の決疑論〔*Casuistik des Rechts*〕であった。彼は、この目的のために、有名な法律問題や世間の注目を集めた事件〔*causes celebres*〕に関するすばらしいコレクションを作成した。彼は、コレクションについて、彼の見解や判断による注釈が施されている有名な法律事件は、彼の死後、上梓されるよう取計らわれるべきだと、繰り返し述べていた。それは行われなかったし、このコレクションがどこに行ったのかは分かっていない。上記によって私たちは、ある党派からはきわめて高く評価され、別の党派からは不当かつ情け容赦なく侮辱された、この有名な政治家の簡潔な生涯像を提供しようとしてきた。彼に関しては、〔以下のことについて〕多くのことを話すことができるであろう。彼がボルン、ブルーマウアー、レッツァー〔*Retzer*〕とともに、フリーメーソンのウィーン支部における主要な指導者に数えられたフリーメーソン会員としての立場について。大部分をゾネンフェルスが占めていたユダヤ人特許〔*Judenpatent*〕起草への彼の関与について。彼が、あの忘れがたいファン・スヴィーテン〔*Gottfried van Swieten*〕と分担し合った教育制度管理への活動について。この問題への彼の積極性、エネルギーがとても大きかったので、

学識あるプロテスタントのシュレッツァー〔Schlötzer〕は彼を「大学の提督〔Universitätspascha〕」と呼んだ。そして、ゾネンフェルスが、皇后に対してためらうことなく高利貸しを擁護し、忘れられない場面を演じた高利貸し特許への彼の関与について。ゾネンフェルスの発言を耳にして、皇后の信頼を得ていた司祭は、激して言った。「聖書にはこう書かれている。汝は高利をとってはならない」と。司祭は続けた。「私たちは、神の言葉を足蹴にして、神が禁じたことが罰せられないようにすべきなのか」と。ゾネンフェルスは答えた。「猥下、私たちのおのおのは、高利貸しであり、神の恩寵により賞賛が与えられております。あなたご自身最もあくどい高利貸しです。4000フローリンと引き換えにあなたは陛下に対して敬虔なる務めを販売されています。私は、あなたの収入の20分の1と引き換えに、同じ務めを行うであろうしかるべき助任司祭を知っております。しかしあなたは自分の才能で暴利をむさぼり、神の赦しを確信されておられる」と答えた。皇后はこの争いを終わらせた。「私は、アエスクラピウス〔Aesculap〕が高利貸しをどう評価しているか、ファン・スヴィーテンに尋ね、知るであろう」。〔こうして〕ファン・スヴィーテンが登場した。彼が皇后の質問にどう答えたのかは、ファン・スヴィーテンの生涯の素描の中で私たちは説明しよう。しかしながら【p.326】議論の結末は、高利貸し法は廃止されることはなかったというものであった。私たちは次のことを理解している。ゾネンフェルスが絶え間なく活動し、古いものにかたくなに固執することでよそでは大きくけなされてきたオーストリアを前に進めさせようと努力したこと。当てはまる場合には濫用を取り除きながら、革新を可能な限りそして生産的に促進しながら、オーストリア全体に、そして彼が生活し活動したウィーンに何よりも貢献したこと、である。多くの光が彼の活動、働きに心地よく輝き、温めてくれるゾネンフェルスのような人物に影があったということ、誰が疑おうとするか。彼にそれがなかったとしたら、ひとはそれを作り出したであろう。彼には多くの敵や反対者が常にいた。彼らを払いのけるために

は、精神のまれなる粘り強さ、人間の全能力、そして、老人の完全な思慮が必要であった。金文字でその記念碑の台座のモットーに「闘いから勝利へ、闇から光へ [Durch Kampf zum Sieg, durch Nacht zum Licht]」が書かれるにふさわしいひとは、彼以外には存在しえないであろう。ゾネンフェルスには欠点があった。そしてそれが、改宗者の中に隠されてきたユダヤ人の匂いを依然として嗅ぎつけ、嫌っていた陣営に起こったように、彼に欠点があると陰口をきくことに疑念を持つことは一般的に必要な。確かにゾネンフェルスには、10回キリスト教に改宗したユダヤ人のように桶一杯の洗礼水では洗い流せない多くのものがあった。たとえば、実践的精神、商業のエネルギーで、それは、古いラテン語の格言を思い出させる。すなわち、*gutta cavat lapidem non vi sed saepe cadendo* [滴は、力によってではなく、何度も落ちることによって、岩に穴をあける] であり、偏見や疑問の余地のない濫用を取り除くことが重要な場合における、理性の問題についての自由な直観、である。だがそれはすべて美德であり、瑕疵ではないのである。そして彼もそれらを十分に持っていた。彼は利己主義であった。とてつもないうぬぼれで満たされ、他人の才能に対して嫉妬深く、不寛容であった。とりわけ、彼らがゾネンフェルスに影を落としたり、彼の影響力を制限したり、あるいは彼を押しつけてしまうという場合にはそうであった。彼は名誉欲が強く、栄光や顕職を過度に目指した。だが、顕職にあっても、功績の一つもない何百、何千もの人間も持っていて、そして、私たちが公平であろうとするならば、ゾネンフェルスに認めなければならないこうした欠点は何を物語るといえるのか。私たちは、彼の功績を簡潔にまとめてみよう。そして、彼がそれをしてもらったように、エリザベート橋に立像を作ることで彼は正当に取り扱われたのか、尋ねよう。老齢になるまでゾネンフェルスの公的活動は続き、4人の統治者に仕え、彼の活動や作用において世のためになる影響力を行使した。困難な時代、何世紀にもわたる旧態依然とした慣行と自由放任によって善に対する感性が失われ、凝り固



まった宗教狂信によってあらゆる啓蒙主義が敵視された時代に、彼は、趣味を良くすることに着手した。〔彼は、〕侮辱と不名誉に公然と耐え、ヨーゼフ2世統治期における啓蒙主義の中の常に最高位の穢れものとして、はためく旗を失望せず守り抜いた。比類ない粘り強さで何度も創刊された定期刊行物を通して、彼はいわば、ウィーン人の無関心で、考えることが嫌いなために怠惰となった心によりよい認識の源泉を少しずつ、導き入れた。あらゆる改革は、それが趣味、風習、信仰、自由というより高い賜物に関わるにせよ、女性【p.327】に由来するということをして正しく認識しながら、ゾネンフェルスは何よりも、機知に富む彼の伝記作者が述べているように、女性と少女を求めた。「文学という餌によって」勝つこと、これは偉大な美的行為を表すものではなく、その効果においては偉大な美的行為としばしば同じ重みを持っている。彼の時代にはまだ、舞台はイタリアのハーレキン〔Harlekin〕、ドイツのハンスヴルストが支配していた。即興の下賤な道化芝居は、その周りに数多くの、ただしあまり洗練はされていない観衆を集め、そして彼らは今日でもシェークスピア、レッシング、ゲーテ、シラーも立派に戦い取っていない勝利を祝した。それらと敢えて戦うことができるのは、知的なヘラクレス〔Hercules〕だけであった。ヘラクレスはヒドラ〔Hydra〕の首を切り落とした時、新しい首が再生しないように、彼はすぐに、血を流している胴体を火で焼いた。そのようなヘラクレスこそゾネンフェルスであった。彼はハンスヴルストの帝国、そしてクルツ・ベルナルドンの野蛮な帝国を打倒した。ゾネンフェルスにとってレッシングという名前は美しい、心を高揚させる記憶に結び付くのではあるが、次の文が残っている。すなわち「レッシングはハンブルクとドイツにとって何だったのかは、オーストリアにとってそれはゾネンフェルスであった」と正しく書かれている。教師として彼は20年以上の長きにわたってたくさんの生徒を教育した。生徒たちの中にはその後、重要な政治家、卓越した学者、そのほかにも有能な、優れたオーストリア国民が発見される。拷問廃止に対する彼の功績は、

敵対者の側からのあらゆる非難にもかかわらず、大きい。そしてついに老齢になって、一部変化した政治状況と彼自身の体力の不足によって、時間の歯車〔の流れ〕を強力に押しとどめることができなくなった時、彼は、帝国・王国造形芸術アカデミー副院長として、歴史や政治に中立的な領域で精力的に活動し、公的、政治的生活においてあらゆる抵抗が無益となり不可能となったことで今や、彼は反対派をこの領域から取り除いていった。上述したことで、ゾネンフェルスについてすべてがとても論じ尽くされているわけではない。ゾネンフェルスには、他の人たちとは異なり、彼のためにも、そして18世紀後半から19世紀前半の重要で内容豊かな時代の解明〔Aufklärung〕のためにも格別の伝記作家がふさわしい。前述する中で伝えられた勲章に加えて、次の事柄が言及される。ゾネンフェルスは、プロイセンから赤鷲勲章〔der rothe Adler-Orden〕を、デンマークからダンネブロ騎士団十字勲章〔das Commandeurkreuz des Danebrog〕を受章し、ミラノの美術アカデミーとエアフルトの学術アカデミーは彼をその会員に採用した、と。フィラデルフィア哲学協会の学位記は存命中、彼が目にすることはなかった。その後彼の後任にホルマイヤ男爵〔Freiherr von Hormayr〕が就いた。彼は、ウィーン大学〔Wiener Hochschule〕の哲学部、法学部の正規メンバーであり、1794年から1796年までその学長〔Rector magnificus〕であった。私たちはこの略伝を最もふさわしく、キュトナー〔Küttner〕が『ドイツの詩人と散文作家たちの特性〔Charaktere deutscher Dichter und Prosaisten〕』で行った簡潔だが機知に富む真実にあふれた次の記述で、締めくくる。すなわち「偉大な創造性、稀なる独創的美しさを持った著作ではないが、正直さと気高き博愛信念にあふれた、小さくも内情豊かな論文をゾネンフェルスは生み出した〔に過ぎない〕。その【p.328】最も本来的な理解において、彼は人間を著述した人物であり<sup>(9)</sup>、彼が多くの世界に関する知識と一般的善意とで完成した自分のすべての論文によって、彼はきわめて実り多い結果を経験したのであった。彼は自ら、刑事法、ポリツァイ制

度そして財政制度の改良を教え、その貫徹を助けた。これにより無数の人たちの幸福が増えた。彼は、断固とした勇気で、舞台や講堂において誤った趣味に反対し、良い趣味を取り入れようと努めた<sup>(10)</sup>。ある時は雄弁家の装いで、ある時は社会的散文で飾られた彼の講演には、素朴さと容易さを融合した堅牢さと輝きが、そして感動的で懲罰的な道徳を融合した鋭敏な機知と笑いを誘う色気が見て取れる。勇敢さ、揺るがぬ精神力、分別、経験、純粹な趣味、そしてきわめて積極的な真理への愛<sup>(11)</sup>によって、彼が書くものすべてに生氣が吹き込まれ、そしてそれらによって、彼の素早い目にはおそらくあまりに些細にそして小さく見えた文体のわずかな不揃いや汚点はほとんど目立つことはない。以上、簡潔な略伝で要約された後、彼の反対者たちに対して次のように答えることができるが、覆すことのできない真実に優るものはない。すなわち、「その人間がどうであったかではなく、彼が何を成し遂げたのか、それこそが歴史において価値を持っている」。そして私たちのゾネンフェルスの伝記は、やはり彼の業績の歴史に他ならない。これ以上の詳細〔は以下を見よ〕。彼の一代記、彼とクロッツやレッシングのような多くの同時代人との関係、彼に対するゲーテやゲレファー〔Gräffer〕の人たちの彼に関する意見、彼の父親、彼の家族、彼の紋章、彼の遺書、彼の肖像画などなどについての資料は、以下のものを参照せよ。

1. ゾネンフェルスによって公刊された著書、年代順一覧【p.328】
2. 肖像画【p.331】
3. ゾネンフェルスの父親【p.332】
4. ゾネンフェルスの家族【p.333】
5. ゾネンフェルスの遺書【p.333】
6. ゾネンフェルスの墓所【p.333】
7. ゾネンフェルスの立像【p.334】
8. ゾネンフェルスの記念碑【p.334】

9. ゾネンフェルスの紋章 【p.335】
10. ゾネンフェルスとボーマルシェ [Beaumarchais] 【p.335】
11. ゾネンフェルスとクロッツ 【p.336】
12. ゾネンフェルスとレッシング 【p.337】
13. ゾネンフェルスと拷問の廃止 【p.338】
14. ゾネンフェルスとゲーテ 【p.340】
15. グレファーによるゾネンフェルスの人物描写 【p.340】
16. ゾネンフェルスのメダル 【p.340】
17. 原典 a) 独立の論文 【p.341】  
b) ゾネンフェルス公刊物に関する雑誌論文やその他の著作 【p.341】

## 解題

ヨーゼフ・フォン・ゾネンフェルスは、カメラリスト (Cameralist)、官房学 (Cameratism. Kameralwissenschaft) の代表者の一人として知られている。「ゾネンフェルスは、ウィーン大学に官房学の講座が初めて創設された際、その教授に任命された人物である。彼は、オーストリアにおいて歴代の神聖ローマ帝国皇帝に仕えた。とりわけゾネンフェルスは、女帝マリア・テレジア (Maria Theresia, 1717-1780) を支えた。ウィーンのマリア・テレジア広場 (Maria Theresien Platz) にあるマリア・テレジア像の南側台座壁面に、ゾネンフェルスは女帝を支えた行政官僚の一人として描かれている。またウィーン市庁舎広場 (Wiener Rathausplatz) には彼の立像が建てられている [この立像は、原文326頁で言及されているエリザベート橋から市庁舎広場に移された]。またウィーン中心部にはゾネンフェルスの名にちなんだ通り、ゾネンフェルスガッセ (Sonnenfelsgasse) もある。さらにベートーヴェンがゾネンフェルスにピアノ曲 (Sonata, piano, op.28, "Pastoral", D major) を献呈したことで知られている。そして何より、ウィーン大学のアルカーデ

ンホーフ (Arkadenhof) には彼の胸像が飾られている。このように、官房学はもちろん、ウィーンそしてウィーン大学の歴史を語る際には、ゾネンフェルスは欠かすことはできない人物なのである」(Cf., 川又、pp.87-88.)<sup>(12)</sup>。

彼の生年は、本項に従えば1732年である。その一方で、*Allgemeine Deutsche Biographie* あるいは *Neue Deutsche Biographie* が「1733年あるいは1734年」としているように、現在も確定はされていない。彼の主著は、ウィーン大学における官房学の教科書『ポリツァイ、商業および財政の基本原則』であり、多くの版を数えている。本項「ゾネンフェルス」は、彼が1817年に歿した60年後に公刊されている。本項は、ゾネンフェルスの生涯だけではなく、上で示したように、1. ゾネンフェルスによって印刷された著書、年代順一覧から、17. 原典 a) 独立の論文、b) ゾネンフェルス公刊物に関する雑誌論文やその他の著作まで、17項目にわたって文献・資料が示されている。これらは、今日においても、ゾネンフェルスの足跡をたどるうえで重要な情報となっている。『オーストリア帝国伝記事典』に取り上げられている他の人たちの中には、これら関連の文献が示されていないものもあるだけに、ゾネンフェルスの伝記描写がとても充実していることが分かる。

原文は、1 ページ二段組で、全文改行なしで構成されている。従って本稿も改行なしで表記している。そこではカメラリスト、教育者、官僚としてのゾネンフェルスだけではなく、啓蒙主義者であるゾネンフェルス、ハンスヴルストや演劇界に対峙したゾネンフェルス、トラットナーの書籍複製に反対したゾネンフェルス、ウィーンの照明を改善したゾネンフェルス、拷問を廃止したゾネンフェルスなど、彼の多方面にわたる功績が簡潔に記述されている。と同時に、レッシングへの対応のようにゾネンフェルスの批判されるべき行動も明らかにされている。本項は、ゾネンフェルスを光の面、陰の面、その面両から正当に評価しようとする姿勢が表れている。原文に関しては次の事柄に言及しておかなければならない。原文では、キュトナーを除いて、

とくに原典引用元を明示することなく引用が行われている。原典を遡ることができないのは惜しまれる。

本項「ゾネンフェルス」の著者名は不明である。本項の原文は、ウェブ上で公開されているものを利用している。

Anonym. „Sonnenfels, Joseph von,“ in : Wurzbach, Constant von (ed). *Biographisches Lexikon des Kaiserthums Oesterreich, enthaltend die Lebensskizzen des denkwürdigen Personen, welche seit 1750 in den österreichischen Kronländern geboren wurden oder darin gelebt und gewirkt haben.* 35. Theil. Mit sechs genealogischen Tafeln. Mit Unterstützung des Autors durch die Kaiserliche Akademie der Wissenschaften. Wien. Druck und Verlag der k. k. Hof- und Staatsdruckerei. 1877. pp. 317-343.

<http://www.literature.at/viewer.alo?objid=11783&page=325&scale=3.33&viewmode=fullscreen>

[https://www.wikiwand.com/de/s:BLK%C3%96:Sonnenfels,\\_Joseph\\_von#/google\\_vignette](https://www.wikiwand.com/de/s:BLK%C3%96:Sonnenfels,_Joseph_von#/google_vignette)

#### 訳者注

- (1) 東京における展覧会は2019年4月から8月まで国立新美術館で開催された。その中でゾネンフェルスの肖像画は、フリーメーソンとの関連の中で展示された。展覧会の図録『日本・オーストリア外交樹立150周年記念 ウィーン・モダン クリムト、シーレ 世紀末への道』26、407ページにおいて、1：啓蒙主義時代のウィーン—近代社会への序章、1-2：フリーメーソンの影響、1-2-1：ヨハン・バプティスト・ランピ（子）、作家、啓蒙主義改革者ヨーゼフ・フォン・ゾネンフェルス [sic]、1813年以前、油彩／カンバス、Wien Museum, Inv. No. 30.825として紹介されている。

この肖像画は、

Johann Baptist Lampi d. J. (Künstler), Josef von Sonnenfels, vor 1813, Wien Museum Inv.-Nr. 30825, CC BY 4.0, Foto: Birgit und Peter Kainz, Wien Museum (<https://sammlung.wienmuseum.at/objekt/44037/>)

で閲覧することができる。

- (2) ゾネンフェルスの自伝「断片」は、ミュラー (Wilibald Müller) が採録している。Cf., Müller, p.13.

- (3) ゴネンフェルスの肖像版画（顔が左向き）は、キング・ライブラリー・デジタルコレクション（King Library Digital Collections）が公開している（Joseph von Sonnenfels: Dem Selben gewidmet von Seinem Freund Schmuzer. Gemalt von F. Mesner K. K. Maler. In Wien zu finden in der K. K. Kupferstecherakademie.）。
- <http://digitalcollections.sjlibrary.org/cdm/singleitem/collection/sjsuLVBopor/id/190/rec/19>
- 一方、ベルナルドンの肖像版画（顔が右向き）は、フィラデルフィア美術館が公開している（Portrait of the Actor Joseph Felix von Kurz (1715-1784), known as “Bernardon.” Joseph von Kurz. Author und Berühmter Comicus unter dem Nahmen Bernardon. Dem Selben gewidmet von seinen Gönnern. Gegraben von F. Landerer. Accession Number : 1985-52-20314）
- <https://www.philamuseum.org/collection/object/12758>
- (4) 正しい書名は、*De l'esprit des loix* で、著者はモンテスキュー（Charles Louis de Secondat de la Brède et de Montesquieu. 1689-1755）と思われる。
- (5) 正しい書名は、*Elemens du Commerce* で、著者はフォルボネ（François Véron Duverger de Forbonnais. 1722-1800）と思われる。
- (6) 正しい書名は、*Theorie et pratique du commerce et de la marine* で、著者は、スペイン重商主義者ウスタリス（Geronimo de Uztaiz. 1670-1732）と思われる。
- (7) ムロン（Jean François Melon. 1675-1738）。
- (8) 名前、生没年不詳。ファイルの引用では、*„le Traité General du Commerce p. Ricard“* とされている（Feil, p.6）。ピカールが誤植だとすれば、正しくはリカール（Samuel Ricard. 1637-1717）と思われる。
- (9) 本項において、キュトナーの原文は、忠実に引用されているわけではない。ここでの「彼は人間を著述した人物である」は、原文では「彼は人間と生活全般を著述した人物である」（ein Schriftsteller der Menschheit und des gemeinen Lebens）となっている（Küttner, p.407.）。
- (10) キュトナーの原文では、「・・・取り入れようと努めた」の後に、「彼は、芸術家を啓蒙し励ましたことで、また多くの同胞への洗練された考え方で、まさに賞賛に値する。」（er hat wahres Verdienst um die Aufklärung und Aufmunterung des Künstlers, und um die verfeinerte Denkart vieler seiner Landsleute）が続くが、ここでは省略されている（Küttner, pp.408-409.）。
- (11) キュトナーの原文では、「真理への愛」ではなく、「祖国愛」（Vaterlandsliebe）となっている（Küttner, p.409.）。
- (12) さらに川又、97頁注(2)を見よ。この他にも、クレムス継続教育大学（Universität für Weiterbildung Krems）にはゴネンフェルスの名を冠した研究機関「ゴネンフェルスセンター」（Joseph von Sonnenfels Center an

der Universität Krems) がある。また、ウィーンのルートヴィヒ・ヴィクトーア・パレス (Palais Erzherzog Ludwig Viktor. Schwarzenbergpl. 1. Wien) の建物上部には、他の石像と並んで高さ2.5メートルのゾネンフェルスの石像がある。

<https://deu.archinform.net/projekte/24719.htm>

#### 参考文献

川又祐「資料 ゾンライトナーに対するゾネンフェルスの直筆署名つき成績証明書」『研究紀要』日本大学通信教育部通信教育研究所、第35号、2022年。

国立新美術館、読売新聞社、ウィーン・ミュージアム編『日本・オーストリア外交樹立150周年記念 ウィーン・モダン クリムト、シーレ 世紀末への道』読売新聞東京本社、2019年。

Feil, Joseph, *Sonnenfels und Maria Theresia : Sylvester-Spende für Freunde zum Neujahr 1859*. Wien. Druck von Karl Ueberreuter.

[https://books.google.co.jp/books?id=a38UmBnC1IAC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs\\_ge\\_summary\\_r&cad=0#v=onepage&q&f=false](https://books.google.co.jp/books?id=a38UmBnC1IAC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false)

Küttner, K. A., „Joseph von Sonnenfels.“ in : *Charaktere deutscher Dichter und Prosaisten. Von Kaiser Karl, dem Großen, bis aufs Jahr 1780*. Zweeter Band. Berlin. 1781. Bey C. F. Voß und Sohn. pp. 407-409.

<https://www.digitale-sammlungen.de/de/view/bsb10733512?page=1>

Müller, Wilibald, *Joseph von Sonnenfels. Biographische Studie aus dem Zeitalter der Aufklärung in Oesterreich*. Wien. 1882. Wilhelm Braumüller k.k. Hof- und Universitätsbuchhändler.

※ 本稿で示されている URL は、2022年3月現在のものである。